

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は久慈市山形町の南側に位置し、久慈川支流「遠別川」の流域にある。南北8kmの細長い盆地となっている。東日本大震災による大きな被害はなかったが、平成28年の台風10号の際には、川が氾濫し、住宅や小屋が流されたり床上浸水したりした家庭もあった。現在は、家屋は新築されているが、川や道路の修繕工事はまだ進行中である。

全校児童は14名で、完全複式学級の極小規模校である。学校でも、家庭でも、学年を超えてよく遊んでいる。地域は、三世帯、四世帯の家庭が多く、学校に対して協力的で、学校行事や奉仕作業等には積極的に参加している。

児童は、東日本大震災の認識が薄い。震災時、6年生児童は4歳であった。1年生児童はまだ生まれていない。また、児童の親族にも被災した方がいなかった。そのため、児童は、東日本大震災はどこか遠い国の出来事のように思っているところがあった。

そこで、本事業では、被災と復興の様子を児童自らの目で見たり聞いたりする活動を通して、東日本大震災についての理解を深め、自分たちでできることを考えることをねらいとした。

II 取組の概要

（1）事前学習

ア 全体での事前学習

全校で東日本大震災について知っていることを出し合い、震災学習列車の利用について全校に説明して見学学習の見通しをもった。

イ 各学級による事前学習

各学級で副読本「いきる・かかわる・そなえる」を活用しながら、東日本大震災の概要を学習した。使用した資料は、「2011年3月11日 東日本大震災」である。

ウ 図書委員による読み聞かせ

図書委員が、全校児童に対して震災・復興に関する本の読み聞かせを行い、学習に関する関心・意欲を高めた。



（2）震災学習列車活用

ア 三陸鉄道職員による説明（車内）

三陸鉄道職員から、沿線地域の被害の様子、復興の様子、震災時の三陸鉄道の対応などについて説明を聞いた。

イ 島越地区の見学

震災時、島越地区に住んでいた本校職員による説明を聞いた。家族や地域の人々の避難の様子や被災の様子、復興の様子、震災を忘れない工夫などについて学習した。





ウ 龍泉洞の見学

平成28年の台風10号による被害を受けた龍泉洞を見学した。当時は、台風による大雨で龍泉洞から大量の水が流出していたが、その面影はなかった。

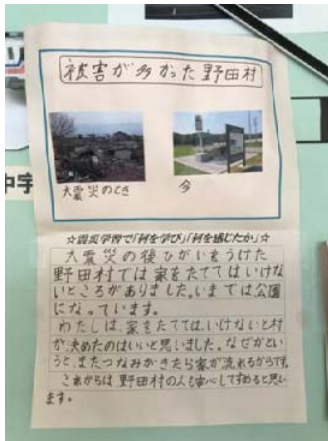
(3) 事後学習

ア 交流活動・追究活動

学級ごとに学習した内容を交流して理解を深めた。高学年では、児童一人一人がさらに詳しく調べたいことについてインターネットを利用して追究した。

イ ミニポスター作成

児童一人一人が、学習を通して特に心に残ったことについて、写真と文章でポスター形式にまとめた。



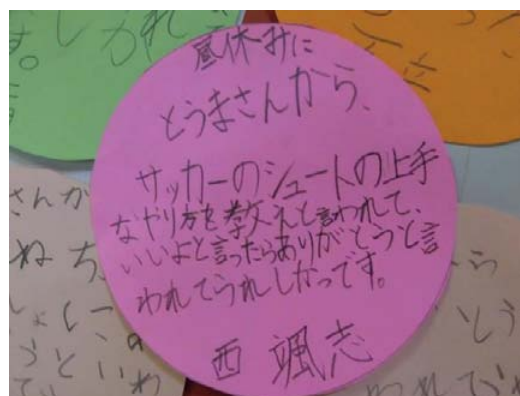
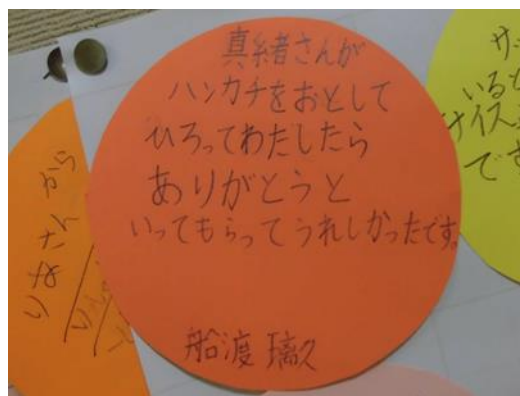
ウ 全校交流会

ミニポスターにまとめたことをもとにして、全校で交流会をした。高学年児童は、パソコンのプレゼンテーションソフトを用いて発表した。発表を聞いている児童は質問をしたり感想を述べたりした。



エ 紙面発表会

保護者や地域の方に対して、学習参観日と期末個人面談日に紙面発表した。



III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 友達との連帯意識の向上

児童は、被災した人や支援する人、復旧工事に携わる人、産業を守り興す人など、たくさんの人々がつながって復興にあたっていることを知った。このつながりこそが、人が生きていく支えになることに気づいた児童が多かった。

そこで、人とつながることを学校生活でどのように生かしていくか児童に考えさせたところ、「友達に言われて自分がうれしくなったことを紹介したい」「友達に励まされたことを紹介したい」という意見が出され、児童会として「友達の良いところを紹介して、ありがとうの気持ちを伝えよう」という活動につなげることができた。

児童は、花カードに友達とのエピソードを書き、「ふわふわの木」に花を咲かせていった。

低学年児童は、上学年児童に助けもらったことや掃除時間にほめられたこと、重い物を一緒に運んでくれたことなどについて友達に感謝の気持ちを伝えた。

高学年児童では、悩んでいる時に相談にのってアドバイスをしてくれたこと、集団登校でのリーダーぶりに感謝の気持ちを伝える内容もあった。

児童は、感謝の気持ちを伝えたり伝えられたりすることによって、友達とのつながりをより強く意識し、友達を大切にする意識を強くして生活している。

また、児童同士のトラブルがあった時には、お互いに事情を聞き合い、お互いが納得して解決できるようになってきている。

地域に目を向けると、本校では、農園作業や伝統行事などで地域の方と一緒に活動することが多い。登下校時にもあいさつをしてくださったり、学校行事にたくさんの方が来校したりして児童の成長を温かく見守ってくださっている。児童は、地域の方とのつながりを大事にする気持ちを

もち、以前より積極的に挨拶をするようになった。

(2) 自分で判断して行動する態度の育成

児童は、災害時に自分の命を守るためにどのような判断をしたか体験談を聞くことを通して、学校での避難訓練や安全学習と関連していることに気づいた。避難訓練で学習する内容は、学校生活だけで終結しない。いつでも・どこでも活用できる「命を守る力」を身に付ける学習である。

本事業の後、10月に地震を想定した避難訓練(休み時間・予告なし)を実施した。地震を知らせる放送が流れると、校内は一瞬で静まった。上学年児童は下学年児童に「窓の近くから離れてこっちに来て」「一緒に避難しよう」「あわてないで歩いてね」と適切な声がけをすることができた。



(3) 本学区の自然災害についての理解

津波被災は沿岸部であったが、本学区の山間部でも自然災害は起きることを児童は経験している。実際に、水害にあった家庭もある。

この経験をもとに、震災被災地の見学を通して、近年に本学区で起きた自然災

害(水害・雪害)にも向き合い、災害が起きる仕組み、災害から命を守る避難行動と復旧に携わる人々の思いについて考えを広げたり深めたりすることができた。

高学年児童では、水害について、急激な天候の変化、降水量と河川の水量の関係、侵食・運搬・堆積の作用、在宅時における避難の仕方などについて理解を深めることができた。

2 課題

(1) 家庭・地域との連携強化による復興教育

本学区の自然災害について学習を深めるには、家庭・地域との連携が大切である。今回、家庭・地域の皆さんにはミニポスターの紙面発表の形をとったが、対面発表にすることで意見やアドバイスを直接聞くことができるよさがある。また、地域に伝わる自然災害の体験談や言い伝えを聞くことができる機会でもあろう。そして、地域で愛情を注がれた児童が、地域を愛して地域のために尽くそうというよい循環が期待できる。

家庭においては、児童の在宅時における避難行動を話し合い、児童の生きる力の育成につなげたい。

本校の教育活動を家庭・地域にもっと積極的に発信して連携を強化していくことで復興教育の充実を図られる。

(2) 学習内容を次年度に生かす手立て

来年度の復興教育を進めるにあたり、今回の震災学習の学習財産を活用できるように整理・保管する。発達段階を考慮して復興教育の年間指導計画(副読本活用を含む)を見直し、復興教育の充実を図る。

